

森の夏 2012 より 第三話
ぼら親父

一床ひろし

第三話 ぼら親父

ぼくの秘密の湖の主、ボラ親父がおおぼらふきだと言うことは前のフクスケの話でおわかりいただいていると思いますが、きょうはボラ親父に私がお返しにほらをこいたことの話です。

その日会社を休んだ私は朝から湖にやってきてボートに乗って針なし糸で釣りを始めました。あんのじょうボラ親父がかかった。ぐいぐい引っ張っばられて竿が折れそうになったので竿をはなすと糸をくわえたボラボスがにやにやしなから顔を出した。

「やい針がなくとも餌ぐらいは糸先に結んでおくものだ、この新米野郎！」

「なにせ、ワニがかかるとおっかないもんでね。」ぼくも負けていない。

「なあに、ワニよりおっかないのはおまえたち人間さ。その証拠がおまえのそのベルトだ。」

あっ、確かに私のベルトはワニ皮製だった。内張りは子牛の皮だ。私の持っているベルトでは一番高級のやつだった。

「こりゃ一本とられた。おやじ、そいで、おまえの好きな餌はなんだい？こんどそれをたくさん持つてくるからよ」

「いりこさ、おかしらつきでないとだめだよ」

「まるでザリガニだね。いりこじゃ、ともぐいというもんじゃないか？」

「うるせえ、魚は大きいのが小さいのを食べる、これがおきてだ。しかし俺はここの主だから、ここの魚を食っちゃいけねえんだ。だから羽虫や水草やミジンコやミミズやお玉じゃくしを食べて、もう飽き飽きだ。いりこやあのトンビちゅうのもつてきてくれ、めっぼううめえそうじゃないか。お礼に魚たちに、5連続ジャンプなどさせて目を楽しませてやるからさ」

「よっしゃ。こんどくるときはもつてきてやるよ。おまい、今5連続ジャンプって言ったが、ひとつおまえがしてみせな。」

「あほお、おれは一回ジャンプのチャンピオンだ。5連続ジャンプはちびたちのじゃれごとだ。一回きりで飛ぶ虫を必ずキャッチするんだ」

「実はほかで5連続ジャンプは見たことがある。川のほとりで笛を吹いていたらいきなりそばでぴょんぴょんぴょんと5回ジャンプをして見せてくれたね。中くらいの大きさの魚だった」

「それは演奏のお礼だったんだろうよ。おまえ笛を吹くんだったら今度ここでもやってみな」

「ここではやりたくないさ。笛の音を聞いて、人がやってくると、せっかくのぼくだけの秘密の湖が秘密でなくなってしまう。針付きで釣りをする人たちがたくさんやって来るようになると、おまえもうかうかしておれなくなるだろう」

「そうだな。人間はおまえだけでいい。」

「実はきょうは相談があつてきたんだ。」

「なんだい、言ってみな」

「ここだけの話だが、おれの職業は、盗賊というやつだ」

「あまりいい商売じゃねえな」

「ケチなぬすっとは違うんだ。あの有名な三億円強盗はおれたちのしわざだ。去年の日銀金塊盗難事件もこの俺が綿密な計画を建てて成功させたんだ」

「それで相談というのはなんだい」

「実は、近頃なんだか近所で私服警官らしい男たちをよく見かけるようになった。もしかしたらアジトをかぎつけられたかもしれないと心配しているんだ。」

「いよいよ年貢の納め時が来たというわけか」

「いや盗みの証拠さえなければ捕まらない。そこで盗んだ金塊を別のどこかに隠すことが必要なんだ」

「おお、それでこの湖に沈めようというわけだ」

「さすが飲み込みが早いね。」

「持ってきな、いくらでも沈めな。おれが見張ってやるから」

「助かるね。」

「で、お礼は何だね。こっちはいりこやトンビじゃあすまなさそうだな」

「金の斧と銀の斧をプレゼントしよう。いつの日かきっと役に立つときが来るぜ、へへへっ」

「おお、このやろう、ひっかけたな。湖の主をばかにしやがって。こんど来るときはおまいのボートは湖の底に沈んでると思え！」

「ははは、ごめんごめん、でも今度は本当にいりことトンビをたくさんもってくるから」

「そうだ、一本釣りみたいなけちなまねをしねえで、空中にひとつひとつ投げ上げるんだ。そしたらおれがジャンプしてうまいところを見せてやる。」

「じゃあな、おやじ」

「あばよ、ほら吹き男」

ぼくは、愉快的気持ちでボートを岸につけて、沈められないように陸に引き上げて、森を帰りました。早く家に帰って、トンビをつまみにビールを飲みたい気持ちになっていました。

おわり

コメント： ほら吹き男と呼ばれてしまいましたが、私のほらは必ずその場でばらします。でないと友達を失います。